『伊勢物語』の学習指導

広瀬節夫

まえがき
一　教　材
二　学習の目標
三　作品の研究
四　教材研究ノート
五　学習指導実践ノート
六　読後感想文　―かれらの読みとったもの―
七　反省のこと
あとがき

まえがき

高等学校における古文の授業というものは、面白くない、というのがほとんど全部の生徒の気持ちらしい。「面白くない」とはどういうことなのか。それは、もっと、「人生」が感じられるものであってほしい、いいかえると、古文にあっても、現代文ほどにはいかなくとも、人間について、生きる、ということについて、少しでも考えたいということではないであろうか。教師としても、たゞ生徒を「面白く」思わせるためばかりではなく、古文を、文学としてとりあつかう以上、当然そのことはしなければならないことだと思う。そして、古文において少しでも人間について、生きるということについて考えるためには、古文の登場人物の生き方その他にたいする生き〳〵した興味を起こすようにするには、古文の学習をどのように展開していくかが問題となってくるのである。それゆえ、私のこのたびの実践の重点もそこにあるわけである。古文の授業を、「文学教育」にまでもっていくためには、授業をどのようにすすめたらいいのだろうか。以下が私の試みた一つの教室の姿である。

一　教　材

まず、教材としては、「伊勢物語」※1 二三段をとりあげた。「伊勢物語」をとりあげたのは、決して意図してのことではなく、現在の授業でそれを行なっているからにすぎない。ただ二三段をとりあげたのは、長い間深く思いあった愛情で結ばれながらほかの女に心を動かした男が、妻の変わらぬ心に目ざめさせられて、再びもとに帰るという、一つの試練をこえて添いとげる男女の純愛を、生徒といっしょ

に読んでいきたかったからである。また、「伊勢物語」の中には、高校生程度では理解できないと思われる内容のものもあり、その点から考えても、この二三段は適当だと思われたからである。さらに、最後の学習作業として、「伊勢物語」と比較するための作品として、※2「大和物語」一四九段を用いた。

※1　金田一京助、佐伯梅友監修「高等古文」（三省堂）二七頁～二八頁

※2　「日本古典文学大系9」の「大和物語」（同大系三二〇頁～三二二頁）

二　学習の目標

1　歌物語という独特の形式をもって形象された、平安時代の人々の姿を読みとる。

2　和歌を中心として事件の展開する歌物語の叙情的な美しさを味わうことは大切であるが、さらに、ここに登場する人物が、平安時代の人々の心から、のっぴきならないものとして産み出されたものであることに気づかせる必要がある。幼な友だちの男女がたどらねばならなかった「筒井筒」の古代的な愛の歴史は、古代社会のしくみの中では、避けがたく存在した、人間の真実の姿であった。こうした、平安時代の人々の心と文学の関係、文学と社会との関係に意識を向けていくのもたいせつな目標である。

3　「伊勢物語」の表現の特色、とくに係り結びのもつニュアンスや、助詞の性格を学び、読みを深めるようにしたい。

三　作品の研究

1「伊勢物語」について

その1　作者

現在見られる「伊勢物語」の作者はわからない。作者について、古来多くの説があり、今、「日本古典文学大系」の解説に整理されている諸説をあげると、㈠在原業平の作、㈡業平の自記であるが、芥川行幸から奥の次男の滋春が書きついだもの、㈢業平の作であるが、伊勢が補筆したもの、㈣藤原敦忠、士生忠岑、源信明などが整理したもの、㈤藤原長能、源道済などが順序を乱し、形をかえたもの、㈥藤原尹行が形を変えたもの、㈦伊勢の作、㈧紀貫之の作、㈨在原一門の作、㈩具平親王の撰といった諸説であり、今日に至るまではっきりしたことはわからない。

その2　特質

いわゆる「昔男」の愛情生活の種々相を描いた物語である。説話としての短編の物語が集められた形をなしており、そこには男女の間の喜びや悲しみや、あわれみや苦しみの種々相が、深い愛情の世界の姿として美しく描きつづけられている。しかし、それが、単なる愛情生活の物語というだけでなく、「歌物語」であるところに一つの著しい特色がある。すべての段が、和歌を中心として物語的世界を構成しているのであって、和歌が、それを取り除いたらば物語の世界が成り立たなくなるような関係に置かれている。そしてそれは、「伊勢物語」の主題として見られる男女の愛情の世界を、叙情性の豊かなものにしている。もう一つの特色は、表現にみられる素朴簡潔な筆致と、人物の行動の具体的な描き方とであろう。それは、平安朝初期に生きた人々の姿や、そこに生きた人々の目にとら

えられたそぼくなものの持つ美しさが新鮮に伝えられて「伊勢物語」の一つの大きな魅力を生んでいるである。

その3　文学史上の位置

「伊勢物語」は、いちばん初めにできた歌物語である。かなの発明が和文文学の発展を促し、「竹取物語」などがそういう時代の生んだものであった。「伊勢物語」もまたそういう時代のものであった。それは、愛情生活の素材の新鮮な魅力や、和文文学上昇期の力強い表現とあいまって、以後の文学に大きな影響を与えた。歌物語の系列としては、この後、「大和物語」あるいは短編小説集としての「堤中納言物語」のような作品が生れる糸口を作ったわけであるが、最も注目されるのは、「源氏物語」のような傑作の生まれるたいせつな糸口の一つとなっているということである。「伊勢物語」に描かれている愛情生活の種々相は、「源氏物語」にさまざまのヒントを与えているようであるし、また、短編の歌物語において魅力を発揮した、「伊勢物語」の叙情的表現は、長編の「源氏物語」において、さらに洗練された新しい叙情的表現の美を生んでいるのである。

2「筒井筒」（二三段）について

その1　主題

長いあいだ深く思いあった愛情で結ばれながら、ほかの女に心を動かした男が、妻の変わらぬ心に目ざめさせられて、再びもとに帰るという、一つの試練を越えて添いとげる男女の純愛を、作者はかぎりない思いやりをふくめて物語る。

その2　構成

第一段　幼な友だちの男女が、成人してかたく愛情を通わしつづけて、ついに夫婦になったこと。

第二段　男は、行商に行った先の高安の女と親しくなったが、妻が変わらぬ心をもちつづけ、恐ろしい立田を越える夫を深くしのんで和歌を、身ずまいを正してよんだのに動かされて、再び愛情を取りもどすようになったこと。

第三段　男は、なおまれには高安の女をたずねたが、慣れてうちとけすぎるふるまいをするようになったその女には、心うくなってしまい、女のほうでは、それとも知らず、むなしく待ち恋う歌をよみつづけていたこと。

その3　叙述

「井」は、村里のたいせつな共同の水くみ場であり、社交場であり、そして子どもたちの遊び場でもあったのである。その「井のもとにいでて遊ん」でいた幼いふたりが、「おとなになりにければ」、「恥ぢかはしてありけれど」心と心は通い合って男はこの女をと思い、女もこの男をと思い、親が縁談を勧めても聞き入れないで来た、と物語られる。そのとき作者は、「井のもとにいでて遊びけるを、おとなになりければ」と接続助詞「を」用いて逆接を表わしているが、次の「男も女も、恥じかはしてありけれど」の接続助詞「ど」による逆接とは、はっきり使い分けている。「ど」が、ふたりの表面上の恥じらいと内心の思いの矛盾関係を示しているのに対して、前の「を」は、そういう論理的矛盾の表現とは違った働きをしている。ある状態が次の状態に調和しなくなった関係を示す逆接の

「を」（塚原鉄雄「接続助詞」、『解釈と鑑賞』昭三三4）を用いたのである。「遊びけるをおとなになりにければ」とおとなになったことを完了の助動詞「に」と過去の助動詞「けり」を重ねて表現する底には、いつのまにか不可抗力ともいうべき身体の成長がふたりをおとなにしてしまったことという意識が横たわっている。「おとなになりにければ」と「に」をはずして表現した場合と大きな違いがある。女は「親のあはすれども、聞かでなむありける」と語られている。「なむ…ける」という会話的な係り結びの口調が、この物語をいっそう親しいものにする。「筒井筒井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな」という、それとない歌いかけに、女も「くらべ来しふりわけ髪も肩過ぎぬ。」と答える。それだけで通じ合う間柄であったのである。

「いひいひて」は、この歌の贈答が今までせきとめていたものを破ると、その後ふたりの間に、歌の贈答が次々とかわされたことを表わしている。歌物語は本来、人々にとって忘れがたい歌の生まれ出た時の事情を語り伝える、歌のための物語であった。物語のための歌ではなかった。しかし、歌物語のかたり手たちは、平安時代に新しく興って来た散文精神によって歌だけでなく、歌の物語の方につき動かされた。二首の歌をあげることだけで満足できず、「などいひいひて」と語る作者は、貴族社会の外の幼い男女の牧歌的な恋の歌をあげることだけで満足できず、かれらがその後通らねばならなかった「世の中」―男女の関係の歴史をたどってみねば気がすまないのである。歌という感動の断面を切り取って歌い上げる叙情精神の営みだけにとどまらず、人間というもの全体をふりかえってみなければ気のすまないものが、かれらの中にわき出て来ていたのである。「すきもの」である昔の「男」の生涯を歌の物語によって物語ろうとする作者は、この幼なじみの二人の恋のたどる運命も追及してみねばおれないのであった。このように歌の世界では歌心とは別の新しいもの―物語る心が生まれて来て、自然と叙情精神と散文精神のからみあった一つの新しい文学形態を形成したところに、歌物語の特色がある。

「伊勢物語」は九世紀から十世紀の初めの社会の実態を忠実に反映している幼なじみのふたりが結婚すると、男は夜になれば女の家に来て暮らすようになっていたのである。（婿入り婚）男は女に対してあまり経済的には援助することがなく、女自体の家の財産が女の生活をささえ、女の家での男へのもてなしをささえており、男の収入は男の家の経済を支えて、男の姉妹の経済的基盤となっている関係をぬきにすれば、男の不誠実をなじることはやさしい。

四　教材研究ノート

前にのべたように、「伊勢物語」二三段は、試練をこえていく男女の愛情の一つの姿を書いたものである。そのあり方を深くみつめて、この作品における、その愛情の姿の描き方をはっきりつかみ、ひいては、生徒自身の愛情についての考え方までも呼びおこす、というのが、私自身の、この授業にかけた願いであった。それを実現していくための指導計画として、私は授業の展開を、次のように計画した。

1　まず、読みによって作品のあらすじをつかむ。

2　作品を三つに分け、叙述をおさえながら内容の理解を深めていく。（ことばのもつ意味の検討、文章の理解が、たんにそれだけ

にとどまらず、それを通してより深く、作品の内容をつかむ足がかりとなれるよう留意する。）

3　生徒達の話しあいを通して、主題をより深くつかみ、内容理解を深める。

4　「伊勢物語」の特質を理解させる。――「大和物語」との比較を通して。

（35・6・28～35・6・30）

時	学習目標	指導項目	指導の実際 指導内容	留意点	配当時間
1	1　読みによる内容（あらすじ）の理解	(1)　朗読のしかた	○歴史かなづかいの正しいはあく ○古文特有のよみ方の正しいはあく （例）　前裁、　飯匙、　筒子 ○助動詞、助詞の他の語との接続を考える。	○読むときの語の接続	10分
		(2)　あらすじのはあく	○黙読によってあらすじをはくさせ、段落を分けさせる。	○三つの段落に分ける。	
	2　叙述の分解による内容の理解	(1)　第一段の内容のはあく	A　主要人物、B　時、C　所、D　その境遇、E　事件の展開、F　ことばのもつ意味の検討 ＜その1＞ むなかわたらひ 婚ふ まろがたけ ほい ＜その2＞ 井のもとにいでて遊びけるを。 過ぎにけらしな。 たれかあくべき 女をこそ得め 聞かでなむありける	○A、B、C、D、E、F、のことを考える手がかりとしてことばの意味を理解させる。 ○逆接の「を」 ○「けるらし」 ○係り結びの効果 ○「で」＝「ずして」	20分

2			
	(2) 第二段の内容のはあく	もとよりかくなむ（　）	
	A、B、C、D、E、F 〈その1〉 たよりなくなるまゝに いふかひなし 異心 けそうず　うちながむ かなし 〈その2〉 さりけれど かゝるにやあらむ いふかひなくてあらむやは 夜はにや君がひとり越ゆらむ 〈その3〉 風吹けば沖つ白波たつた山	○「さ」の内容 ○「かゝる」の内容 ○反語としての「やは」 ○序詞のはたらき	20分
	(3) 第三段の内容のはあく		
	A、B、C、D、E、F 〈その1〉 心にくし 心憂がる 〈その2〉 初めこそ心にくくもつくりけれ 見つゝををらむ 頼まぬものの 見いだすに、喜びて待つに。	○文の途中の係り結び ○のはたらき——逆接 ○感動の助詞「を」	10分

3 主題の追究による内容の理解	(1) 各段の関連とその発展のはあく (2) 三人の人物についての感想を話しあう。妻をもちながら新しい妻をもった男が、もとの妻の所にかえっていく動機、原因について話しあう。	(1)「大和物語」（一四九段）と比較させる。 （次のようなものを着眼点としてあげ、そのちがいを書かせる。） A、主題　B、表現　C、登場人物 (1) 形容詞連用修飾 もろともにいふかひなくてあらむやは (2) 已然形の条件法 はじめこそ心にくくもつくりけれ (1) 簡潔性（短文的性格） ○係り助詞「なむ」の表現効果 (2) 単一性 ○書き出し「昔、男ありけり」 ○登場人物の呼び名がないということ ○文末の「けり」 (3) 情意性 ○心理表現　の一つとしての条件句の疑問表現 「かゝるにやあらむと思ひ疑ひて」 ○ プリントによって簡単に説明する。	○「大和物語」（一四九段）の読解作業は「伊勢物語」（二三段）と対照させながら簡単にやる。 ○「聞き手への確かめ」として説明語りにふさわしい性格を理解させる。 ○ 雰囲気的な浪漫性	20分 （読解のために） 20分 （感想文をかく） 10分 （その整理） 20分 （話しあい）
4「伊勢物語」の特質の理解	(1)「伊勢物語」の文芸性のはあく (一) 語法の特色のはあく (二) 文体の特色のはあく (2)「伊勢物語」の文学史上における位置の理解			
まとめ	○この古文の教室についての感想文を書かせる。			家庭で書いてもってく。

五　学習指導実践ノート

教材研究ノートでたてた指導計画を実践するにあたって、私は次のことに留意した。

1　語句の説明のばあいに、あまり作品からはなれた語源の詮索におちいらず、そのことばが作品の中でどう生かされているか、を主にしてやっていくこと。

2　読解の際、できるだけ考えやすい問いを与えるように努め、生徒達が自分でものを考え、古文の学習に積極的に参加するようにした。問いはプリントにして、授業のまえに渡した。

3　歌物語という形式で書かれたために、ふつうの物語とは違った性格をもっているが、その一部分なりとも気づかせるようにする。

4　この作品の背景となった当時の生活ーことに男女の生活のしかたの今日とのちがいについて理解させておく。

5　生徒のなまの感想を自由にのべさせる。

6　感想文を書かせ放しにせず、整理しなおし、その作品について、生徒各自、自分の考え方以外にも、さまざまの考え方をもちうることに気づかせる資料とし、さらに深い作品検討に入っていく手がかりとなるよう努める。

（35・7・1〜35・7・6）

時	学習指導目標	学習指導の展開				
		教師のといかけ	生徒の応答	留意点	反省のことども	所要時間
1	1	どんな物語か。	二人の女性と一人の男性との物語。	○手がかりとなる所を指摘させる。		10分
	(2)	その人物の登場にしたがってこの文章をいくつかに分けてみよ。	三つに分けられる。 1相思相愛の男女　2新しい妻をもった男ともとの妻　3新しい妻			
1	2	どんな人物が出てくるか。 どのような境遇の人か。 その二人はどのような関係にあったのか。 「を」と「ど」は逆接の接続助詞とすると、こゝではどのように使いわけられているか。	男と女 「むなかわたらひしける人の子供」 「井のもとにいでて遊びけるを、大人になりにければ、男も女も恥ぢかはしてありけれど……聞かでなむありける。」 「ど」→ふたりの表面上の恥じらいと内心の思いの矛盾関係を示す。 「を」→論理的矛盾の表現とは異なる。ある状態が、次の状態と調和しなくなった関係を示す。	○語意のはあく		20分

「大人になりにければ」と「大人になりければ」とはどのようにちがうか。
「聞かでなむありける」の主語はなにか。

そのあと二人はどうするか。
会話文に書きなおしてみよ。歌であらわしたときとどのようにちがうか。
近代小説の中にこのようなものを描いたのがあるか。

「に」（完了の助動詞）があることによっていつのまにか身体の成長がふたりをおとなにしてしまったという意味をつよくする。
男女どちらでもよい。
女でもよい。しかしそのためには「女をこそ得めと思ふ」のところが句点にならなければならない。
思いのたけを歌でかわす。
歌で表現されたものに何かうるおいがあるようだ。

「たけくらべ」（樋口一葉）

○ 歌物語としての性格をはあくさせる

(2)

そのあと男と女とはどうなるか。
なぜか。なにが動機か。
「もろともにいふかひなくてあらむやは」は誰のことばか。
女はどうしたか。

「さ」は何をさすか。

その妻の態度に対して男はどんなに考えたか。
「異心」とは？
「かかる」とは何をさすか。

「男、河内国、高安の郡に行き通ふ所いできにけり。」
「女親なく、たよりなくなるまゝに、」
男。
「さりければ、このもとの女……いだしやりければ」
「男、行き通ふ所いできにけり」ということ。
「異心ありてかゝるにやあらむ」

「悪しと思へるけしきなくて、いだしやる」こと。

○「まゝに」の語意
○「やは」の解釈
○「さ」のさすもの

20分

「この女いとようけさうじて」には女のどんな気もちが表わされているか。 「風吹けば……」の歌にはどのような女の気もちが含まれているか。 なぜ「かなし」と思ったのか。	変わらぬ心。 男のことをたえず思いつづけている心。 「女の変わらぬ心」にうたれた。	○ 序詞のはたらき	
(3) 男はどうして高安の女を「心憂がる」ようになったか。 「初めこそ心にくくもつくりけれ」というのは「中垣こそあれ一つの家のやうなればのぞみてあづかれるなり」（土佐日記）と同じ表現であるか、この係り結びはどんなはたらきをするか。 そのような男に対して女はどうしたか。	「初めこそ心にくくつくりけれ、今はうちとけて…」 うちとけてしまった女に失望した。 もとの妻の変わらぬ心にうたれた。 ↓ 逆接的用法 男をまちながら歌をよむ。	○ 平安時代の若い女の身だしなみについて話す。 ○「心にくし」の語意。	10分
(1) この男についてどのように思うか。	親のいうことをはらいのけてまで一しょになりながら、生活のたよりがなくなったというので、新しい妻をつくるというのは不誠実である。（女） しかし当時の生活様式としてしかたがなかったのではないか。（男） それにしても真実がないと思う。（女） われわれの道徳からいえば、たしかに誠実さに欠けるが、物語を書くという立場から		20分

3	その男にもなにかいい所はないか。 男が再びもとの妻へかえったのは何のためか。 「もとの妻」と「高安の女」とを比べてみよ。 なぜさいごに高安の女のことを描いたのか。 結局、この作品が書こうとしたものはなにか。	いえば、互いに思いあって一しょになったというだけに男の不誠実さが強く表現され、リアルなところがある。（男） たしかに快く自分を送り出す妻を、異心があるのではないかと疑うところなどきわめてリアルである。（女） 自分に対して変わらぬ心をいだく妻を「かなし」と思う善意をもっている。それがために新しい妻にひかれたのだ。（男） それはこの男のいい所というのではなくて、こゝに出てくる妻のよさだと思う。（女） 妻の純粋な愛情にうたれたのである。（女） もとの妻はつねに変わらぬ心をもち身だしなみもある。それに比べて高安の女はだらしないところがある。（男） 不幸な女性を描いた。（女） あわれというものが、ただよっているようだ。（男） もとの妻にかえっていった男の心の変わらぬことをかいた。（男） 一つの試練をへて、そいとげられる男女、とくに女の純情（純愛）をえがいた。	生徒の書いた「大和物語」との比較の文章の中から問題となるものをひろって話す。	○感想文を手がかりにして、作品への理解の広がりを発見させていきたい。	20分 「大和物語」の読解	20分（感想文をかく） 10分整理 20分話しあい

六　読後感想文

――かれらの読みとったもの――

こうして学習を展開して来たわけであるが、授業を進めていくにつれて、この授業のつみ重ねの結果として、生徒達の心には、さまざまの感想が生まれていることがわかった。しかし、それは非常にばくぜんとした形のものであり、それが生徒の頭の中でもっとはっきりした形をとらなければ、そこからは何も発展してゆけない。生徒の頭の中にばくぜんと生まれかけている感じ―それをはっきりさせて、さらに新しい考えを発展していかせるために、読後感想文を書かせることにした。しかし、ただ書くだけでもよいが、何か比較するものがあった方が、もっと自分の感じなり考えなりを、しっかりとらえることができるであろう。そうしたことから、私は、この作品と、「大和物語」（一四九段）を比較させてみることにした。以下の感想文でわかるように、かれらは、叙事的な、また、歌物語というよりもはるかに物語的な、さまざまの点で「伊勢物語」二三段にくらべて叙情性のうすい「大和物語」一四九段と比較して、あらためて、「伊勢物語」二三段の特色をはっきりつかんだようであった。

まず、かれらの眼は、表現の比較にむけられる。「伊勢にしろ大和にしろ男女関係を取材している所から根本的条件は同一であるが、伊勢に於ては、この男女関係というものを、順序立ててその心理状態の変化の追求が自然に行なわれて平然としてタッチも軽い表現法を使用し、主脈ともいえる歌の中に、又それに前後してその関係を歌によって盛りあげているのに反し、大和ではドライなタッチで描かれていると思う。」（男）「伊勢は叙情的で、大和は叙事的である。」（女）「伊勢物語が短文で人間の心理をえがいてあるのに対して、この大和物語は、長文で情景がえがかれている。だから、女の純情さについても、伊勢物語では、『風吹けば……』の歌だけで表わしているが、大和物語では、それに加えて、『かなまりに水を入れて……』とあるが、あまり功果的ではなく、短文ではあるが伊勢物語の方が、何か感動的である。」（女）「『伊勢物語』では、心理的な描写であるが、『大和物語』では事件がどんなに展開していくかということの方におもきがおかれているように思う。」つまり、まとめていえば「伊勢物語」は、「大和物語」とちがって、歌物語としての性格が濃厚であり、タッチも軽いこと、叙情的であること、人間の心理描写を中心としていること……である。そうして、終わりの人間の心理描写を中心としている、という発見は、もう、叙述表現についての感想というところから発展して、主題の考察という所までいたったものである。そして、かれらは、主題については「伊勢物語」を「大和物語」とは、次のような違いがあるとしている。「『伊勢物語』は、あくまでも、男女間の心理描写としてとりたい。『大和物語』は、人間の欲の描写、このばあい、欲とはいっても、しかたなしの、他の妻を作るということであるが、これも人間の本能を表わしているのではないかと思う。例えば、もとの女と新しい女に対する男の心理描写が深く表わされていない。やはり始めの女が『けうらなる』から、この男の気持が動いているという、やはり男性が見知らぬ女性をめとるばあい、第一に器量ということは、古今東西を問わずではないかと思う。」（男）「『伊勢物語』では、始めの妻の純情さについてであるが、この『大和物語』は妻

の純情さもあるが、それよりか、金銭的なものが強いように思われる。」（女）「『伊勢物語』は、男女間の心の動きを中心としているが『大和物語』も心の動きが決定的な条件となってはいるけれども、それに男のはでな金銭的欲望が加わっていると思う。しかし二つともはでなうわべだけの乱れた生活が負けてもとの妻の所にもどって来るところがおもしろいと思う。」（男）「『伊勢物語』においては、女の純情な心を表わしているが、『大和物語』においては、主に、男の心の変化が書かれている。」（女）

つまり「伊勢物語」は、男女間の心理描写を中心として書かれたものであり、一方、「大和物語」は、心理描写ではなく、金銭の欲望を中心としたものである、ということであろう。それをさらにいいかえると、女生徒のいう、「妻の純情さ」ということであろう。そして、「純情な妻」に共感する生徒の一人は、次のような、しんらつな男性感をのべるところまで発展している。「教科書の男性は、『この女をこそ得め』といってもらったのに、親が死んで生活のたよりがなくなったといって他の女を得るという、この時代の風習には納得できない。殊に思っていないが、金持のため一しょになったというこの男性は現代の男性とさして変わりない。時代は変わっても、人間の根本精神はちっとも変わっていない。女は不愉快と思うようすをしないで夫を送り出すといっては異心があるのではないかとかんぐる。自分は、どんな事をして妻を悲しめているかも考えないで、歌をよむのを聞いてはじめて女の気持がわかる。この男性はたくさんの女をつくっている男性としては、あまりにも価値がなさすぎる。」（女）と。

七　反省

こうして、私の「伊勢物語」の教室は終わった。最後の時間に、生徒たちに、この教室での反省を書かせてみた。それを中心に、私の授業を反省していきたいと思う。

1　「問いかけ」による学習について

生徒の感想文を読むと、「重要なところがわかった。」「文章を理解する上から、役に立った。」「目標がはっきりした。」「自分で考えるようになった。」「その学習に興味がもてる。」「古文学習に意欲が出て来た。」「設問があると、考えるべきところはどこかということがわかるので、予習するのに便利である。」というようなことを、学習者の九五%が答えた。このことから、古文授業においても、問題学習というものが、どんなに大切なものかが、よくわかる。今までの古文の授業というものは、あまりにも、教師の方からの与えっぱなしで、生徒を受け身にしすぎ、それが生徒の古文に対する学習意欲を失わせる一つの原因となっていたように思われる。教師はもっと、生徒たちの手による学習というものを、古文のばあいにも考えなければならない。そして、そうした学習をさせるためには、私たち教師の方も、何を学びとらせるか、ということを、その教材を通して一時間ごとにはっきりしておかねばならない。そそして、そうい教材観は、その教材の本質を的確にはあくすることによって樹立される。

2　文法の指導について

「文法をもっとたくさんとりあげてほしい。」という意見が五%ほどみられた。文法的事実をいわゆる文法的に説明しなかった、この教室で当然出て来る感想である。生徒達の中には、古文の教室

は、すなわち文語文法の教室という考えをもっているものがずいぶん多い。しかしながら、作品から、完全にはなれてしまっての文法学習が、今の古文の教室では、あまり多く行なわれすぎている。そうしたやり方が、どれだけ古典をほんとうに読んでいくために役立つかは問題であろう。また、そうした語句の解釈だけで終始するやり方では、かえって文語文法そのものをも、生き生きとした知識として頭の中に入れることができなくなってしまうのではないだろうか。すばらしい古典の教室というものは、語句の解釈、文語文法の学習、そういったものがすべて、作品の内容理解と深くむすびつき、作品を深く読んでいくためにすることとして生かされている、そうした状態をいうのだと思う。私のばあいは、もっともっと、このような形での授業を重ねていき、文法授業を文学としての古典教育の中で消化していきながら、知らず知らずのうちに生徒の中に文法の生きた知識を蓄積していく——こうした努力によって、あの五%の不安を消していきたいと思う。

3　読後感想文について（感想文を書くことによって、作品理解を深めるということ。）

読後感想文を躍動したものにしようとして、「伊勢物語」と、「大和物語」との比較をさせてみた。その比較の結果は、前にのべた。そして、その学習作業について、「『大和物語』を読まなかったら、これほど『伊勢物語』に対する理解も深まらなかっただろう。」（女）「『伊勢物語』の学習というものが、それ一つにとどまらないで、平安時代の物語のすべてにつながっているのだということを知った。」（男）などの感想からもわかるように、比較作業というものが、一つの作品のみでなく、二つの作品の理解にまでおよぶことを示してくれるものである。そして、ただ一つの作品を読む場合と比べてさらにもう一つの作品を読む場合は、その理解がいっそう深められていくのである。ところが、「『大和物語』の文章も読めないのに、どうして比べることができようか。」という反省もでて来た。何らかの形ででも「大和物語」と、「伊勢物語」の差を指摘できなかった生徒が九%いた、ということを考えあわせ、その原因をつきとめなければならない。すなわち、二つの作品を比較させる時の作品の読み方を、さらに工夫しなければならないと思うのである。感想文の内容についていえば、大体「伊勢物語」の内容はよく理解されたといっていいようである。とくに女生徒たちの中には、内容理解からさらにすすんで、独自の男性観をうちだしたものもいて、興味深かった。ただ、二つの作品を比較した結果の感想文であるせいか「伊勢物語」の構成、作者の態度、女主人公のあり方、などに対して、単に「理解」の域を出なかったのは、もの足りない気もする。もっと批判のはいった文があってもよかったと思う。しかし、そのためには、もっと感想文の書かせ方を考えなければならないであろう。

4　教材としての「伊勢物語」について

二年生の補習授業で、「伊勢物語」の全編を読んだので「最も興味の深かったもの」を調査してみた。そして、九段（三五%）、二三段（一〇%）、二四段（一〇%）、八四段（一〇%）（その他は省略）という結果を得た。「伊勢物語」の中には教材として、あまり適当でないものもあるが、今あげたこれらのものは、かれらにとって、理解も容易であるから、教材としては適当なものであろう。

導の一かくとしての口語訳ということを考えてみたいと思う。

（昭和三十五年九月三日稿）

（広島舟入高校教諭）

あとがき

このような反省にもとづき、これから、次のことを考えていきたい。

(1) 「問い」のだし方

設問による授業をさらに効果的なものにしていくために、どのような問いを、どのような時に出したらいいかを考える。

(2) 読解作業における文法指導のありかた

前に述べたように、文法の授業を、あくまでも、古典文学の内容理解と深くむすびついたもの、その中役で立つものとしていきたい。それは、文法学習の立場からすれば、文法の知識を自由に活用できる能力を身につけるということにもなる。問題は、入学試験、ということである。高校の今の古文の授業が不充分であるということは、そして、もっとのびのびと授業がしたい、ということは、どの教師も認めていることである。しかしながら、実際には、教室では、入試の傾向に、しらずしらずのうちに支配されてくる。国語――とくに古文の授業をもっと豊かなものにしようと思えば、どうしても、この問題を考えねばならなくなる。

(3) 口語訳のありかた

古文は古文として教えるのでなくて、現代のことばや文章や文学と有機的に結びつけながら学ばせる、という気持から、「作文」指